

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院生研究

2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 キリスト教学	研究科	キリスト教学	専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名		
	キリスト教学研究科 キリスト教学専攻 修士1年	出口裕麻 印		
指導教員	所属・職名	氏名		
	キリスト教学研究科 教授	佐藤研 印		
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同	1 名
研究課題名	新約聖書におけるイスカリオテ・ユダ像			
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名		
	キリスト教学研究科・キリスト教学専攻・修士1年	出口裕麻		
研究期間	23	年度		
研究経費	200	千円		

<p><b>研究の概要</b> (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)</p> <p>研究の概要は、新約聖書が描き出すイスカリオテ・ユダ像を抽出することにある。イスカリオテ・ユダは、イエスを十字架に掛ける為の手助けをした裏切り者というレッテルを貼られている。このレッテルを4福音書の執筆者全員がユダに貼っていることは共通しているのだが、必ずしも各福音書記者が描くユダ像は一貫していない。本研究では、新約聖書における各福音書が描き出すユダ像を、ユダが登場する個所の釈義によって抽出し、それぞれの福音書が描き出すユダ像を比較し、ユダの歴史の実存を明らかにすることに徹する。この研究は、4福音書のユダ像を抽出し、比較し、歴史の実存を解明するものである。</p>
---

<p>キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)</p> <p>[新約聖書] [イスカリオテ・ユダ像] [4福音書]</p>
---

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

研究成果の概要は以下の通りである。まず、研究の土台となり前提となる方法論を記述しようと思う。この方法論を確立できたことも、今回の研究における成果であり、また、これからの新約聖書研究を深めていく上で重要なものとなるだろう。今回の研究期間中では、一、釈義箇所が含まれる文書全体の概略を掴む。聖書に問いを投げかけつつ通読する。構成、著者、受手、両者の関係、彼らの状況、執筆年代、執筆場所、執筆目的、思想的特色などの問いを通読しつつ発見しノートに記す。そして、自分自身の研究結果を第二次文献と照合させる。二、釈義箇所のパラグラフを確定釈義箇所のパラグラフを NESTLE と UBS を中心に、多くの日本語訳聖書を比較して導き出す。それぞれの聖書に相違がある際は、自分で吟味し暫定的に決定する。三、暫定訳を作成。釈義箇所を含んでいるパラグラフ全体を翻訳する。その際に、本文批評と文法の分析を同時並行に行い本文を確定しつつ翻訳し、重要な点や気づいた点などをメモしていく。そして、パラグラフごとの私訳を終えるごとに、他の翻訳と比較しつつ私訳を整える。という手順を踏んで研究を進めた。ただ、三の項目においては、研究時間の都合上、本文批評の基礎を知る上で重要な二次文献の読書のみで止まった事を断わっておく。

次に、手順一の方法論によって得ることのできた研究成果について述べていく。この方法論一では、各福音書の、構成分解・アウトライン・資料・著者・執筆年代・執筆場所・執筆目的・思想的特色、を項目毎に整理しデータ化した。ここで一つ一つ紹介をしていくと報告書に収まらないために、各福音書の思想的特色のみを書こうと思う。

マタイ福音書。マタイ福音書の思想的特色は、異邦人への宣教、教会の重視である。異邦人への宣教は、マタイ福音書の「するとイエスが近寄って来て、彼らに語って言った。『私には天上と地上との、すべての権能が与えられた。そこで行って、あらゆる異邦人を弟子とせよ。〔その際、〕彼らに父と子と聖霊の名におけるバ浸礼を受け、私があなたたちに指示したすべてのことを守るように、彼らに教えよ。そして見よ、この私が、世の終りまで、すべての日々にわたり、あなたたちと共にいるのである』」(28:18-20 岩波訳聖書)との言葉から明らかにされる。この異邦人への宣教の強調は、キリスト教の母体となるユダヤ教の信者であるユダヤ人への伝道が絶望的になっていたことに基因すると考えられよう。この異邦人宣教の正当性を主張する記述は、マタイ福音書の至るところに見受けられる。例えば、イエスを最初に礼拝したのが異邦人(2:1)であることや、十字架におけるイエスを見ることによって信仰を持つのも異邦人(24:54)であることなどである。また、旧約聖書においてもその根拠が見出されるということが大胆にイエスの口を通して語られる(21:43)。教会の重視は、マタイ福音書の「この私もまた、あなたに言う、あなたこそペトロである。そしてこの岩の上に、私は自分の教会を建てよう。そして黄泉の門も、これに勝つことはないであろう。私はあなたに天の王国の鍵を与えよう。そしてあなたが地上で結ぶものは天上でも結ばれたものとなるであろう。またあなたが地上で解くものは天上でも解かれたものとなるであろう」(16:18-19 岩波訳聖書)から見出される。また、18章のイエスの説教においても、教会の権威が高められていることを窺い知ることができるだろう。

マルコ福音書。マルコ福音書の思想的特色は、イエスのメシア性の隠蔽が挙げられよう。イエスのメシア性の隠蔽は、マルコ福音書の「そして彼らが山から下りて行く時、彼は〈人の子〉が死人たちの中から起き上がるまでは、見た〔さまざま〕ことを誰にも物語るなど、彼らに命令するのであった」(9:9 岩波訳聖書)という箇所において見られる。この他にも、イエスが、病人を癒した後や説教の中でメシアであることを隠しておくように命じる箇所が多数ある。イエスのメシア性の隠蔽は、栄光あるカリスマとしてのイエスではなく、十字架の道をひたすら目指して歩む受難者としてのイエスを、福音書の著者が強調して描いたことによるものであろう。

## 研究成果の概要 つづき

ルカ福音書。ルカ福音書の思想的特色は、キリスト者としてこの世を生きるための倫理の強調、終末期待の薄弱、殉教者としてのイエス像が挙げられる。倫理の強調は、「悔い改め」という言葉が、ルカ福音書の中で14回用いられていることから窺い知ることができる。「悔い改め」の強調は、キリスト者としての正しい生き方を奨励するためのものであり、それ以上に救いの必要条件となっているところが興味深い。また、金銭に対する倫理を強調する箇所(徴税人ザカイオスの物語19:8-9、財産問題の物語12:13-15、王と戦争の譬14:33など)が多数含まれていることから分かる。富への執念を絶ち切ることは、神への信仰をもってでしか成されない業であり、もっぱら神を信頼していなければできないことである。ルカ福音書は、富を捨て大胆に神を信頼することを読者に促しているのであろう。終末期待への薄弱は、ルカ福音書における、終末に関する話題の中でイエスが「すぐさま〔世の〕終末ではない」(ルカ21:9 岩波訳)と言っていることから分かる。殉教者としてのイエス像は、マルコ福音書15:39において、イエスの十字架での死を見届けた百卒長が、「ほんとうに、この人間こそ、神の子だった」(岩波訳)と述べているのに対し、ルカ福音書のイエスの十字架での死を見届けた百卒長は、「まことに、この人間こそ義人だった」(23:47 岩波訳)と言っていることから、イエスの神の子性ではなく、模範的信仰者として神に従い殉教死を遂げたイエスが強調されていると考えられる。

ヨハネ福音書。ヨハネ福音書の思想的特色は、先在し受肉したキリスト、栄光の十字架、助けぬしが挙げられよう。先在し受肉したキリストは、ヨハネ福音書のプロローグの「はじめに、ことばがいた。ことばは、神のもとにいた。ことばは、神であった」(1:1 岩波訳)、「ことばは肉〔なる人〕となって、われわれの間に幕屋を張った。一われわれは彼の栄光を、父から〔遣わされた〕一ひとり子の〔持つもの〕としての栄光を観た—〔彼は〕恵みと真理に満ちて〔いた〕。」(1:14 岩波訳)という箇所から見出される。栄光の十字架は、イエスが十字架上で「成し遂げられた」(10:30 岩波訳)というインパクトある言葉によって終わりを迎えているように、他の福音書で語られるイエスの受難や苦悩が語られず完全なる栄光の勝利として描かれているのである。助けぬしは、他の新約文書で見出されないように、ヨハネ独自の言葉である。助けぬしの働きは、地上で生きたイエスの働きと同一だといえよう。助けぬしは、真理を担い、イエスを受け入れさせるように促し、教え導くのである。助けぬしの働きは、イエスの働きが様々であったのと同様に様々に渡る。

手順二の方法論によって得た研究成果は、4福音書のイスカリオテ・ユダに関する記述があり、釈義が必要な箇所(パラグラフ)を暫定的に決定することができたことである。ギリシャ語新約聖書の校訂本であるNESTLEとUBSでは、各物語のパラグラフの分け方が異なる場合がある。その際に、どちらが福音書記者の意図であったかを見分けなければならない。手順二はその作業を行うステップである。重要な作業ではあるが、あえてその箇所を記す必然性はないと思われるので省略する。

手順三の方法論によって得た研究成果は、ブルース・M・メツガー、『新約聖書の本文研究』(橋本滋男訳、聖文舎、1973年)を読書することによって、新約聖書の本文批評をする際に必要な基本的知識を得たことである。新約聖書は、多くの写本を校訂することによって成立している訳であるが、オリジナル本文を確定する際に、判断を揺さぶられる箇所が多くある。釈義をする者も、本文批評を行い自分なりの決定をしなければならない。そのためにも本文研究の知識を得ている必要がある。このことによって、次のギリシャ語新約聖書の暫定訳を完成させるというステップに行くことができるのである。

以上が、今年度の研究によって得ることのできた研究成果である。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

今回は、研究発表の機会は無かったが、今年度に得た成果を修士論文にまとめて学会で発表する予定である。